



ノーノ：断章—静寂、ディオティマへ

発表は 1980 年。ノーノ唯一の弦楽四重奏曲で、彼の後期様式を決定づけた作品とされる。最大の特徴は、ドイツ・ロマン主義の詩人フリードリヒ・ヘルダーリンの詩の「断片」が楽譜に（52 個も！）記されている点だが、これは演奏（発声）するためのものではない。詩人の言葉を内面で反芻しながら、極限の弱音と長いフェルマータによる「静寂」を紡ぎ出すのである。奏者は、従来の弦楽四重奏曲のように「対話」しながら弾くのではなく、音が鳴り止んだ瞬間の「静寂」に意味を見出す、極めて内省的で緊張感に満ちた演奏が求められる。そして聴き手には、断片的な音と沈黙の狭間で、自己の内面へ深く沈潜していく体験がもたらされる。単一楽章で、演奏時間は約 35 分。

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第 15 番

ベートーヴェンの「後期弦楽四重奏曲」の一つである本作は、楽聖の「最高傑作」とも称される重要作品。ロシアの貴族ニコライ・ガリツィン公の依頼により作曲された「ガリツィン・セット」（第 12 番、第 13 番、第 15 番）のうちの 2 番目（1825 年）に書かれた。全 5 楽章で、総演奏時間は約 45 分におよぶ。

「第 1 楽章：Assai sostenuto - Allegro」は、不安や問いかけを思わせる序奏で始まり、情熱と苦悩が交錯する主部へと続く。一転して「第 2 楽章：Allegro ma non tanto」は、軽やかな舞曲風のスケルツォ。続く「第 3 楽章：Molto adagio - Andante - Molto adagio」が、この作品の核心をなす楽章。「リディア旋法による、病より癒えたる者の神への聖なる感謝の歌」というベートーヴェン自身の書き込みがある。これは、本作が重い病から回復した直後に作曲され、神への感謝の念が込められていることを示している。リディア旋法（古い教会旋法）を用いた静謐かつ荘厳なコラル部分と、新たな活力を感じさせる舞曲風のアンダンテ部分が交互に現れる。後期弦楽四重奏曲の中でも特に感動的な楽章とされ、病を得なければ生まれなかったであろう「奇跡の音楽」とも評される。「第 4 楽章：Alla marcia, assai vivace」は、短い行進曲風の楽章で、終楽章への橋渡しの役割を担う。「第 5 楽章：Allegro appassionato」は、苦悩に満ちた序奏から情熱的で力強いフィナーレへと展開し、最後は歓喜と生命への賛歌が歌い上げられ、輝かしく曲を閉じる。